この本との出会いは、恩師の導きか‥‥

先の朝日新聞（2004/3/29）の「ハンセン病の証言集め本に－元患者から聞き取り９年－」の記事を目にした方もいると思う。早速、この本「証言・ハンセン病　もう、うつむかない」を、恩師の言葉を思い出しつつ購読した。

というのは、ハンセン病施設に勤務した経験のある Dr が、私が仕事上でご指導いただいた上司であり、「いつか、ハンセン病の元患者と直接話す機会を作るからね」と私に話してくれたことがあったが、その機会もなく今日に至っている。それだけに、恩師が私に何を学ばせようとしていたか、その答えがこの本にあるかもしれないと思ったからである。

本は、顔写真と実名を出すことに同意した元患者２５名からの著者の聞き取り集である。証言の中には、国の隔離政策の元での非人道的な処遇内容が数多く触れられている。

その中で、施設入所と同時に、除籍の話、「家に帰ってくるな！手紙も寄こすな！」と家族に絶縁された話、殆どの方が家族に迷惑をかけないようにと施設内でさえ偽名使用の話等が、最近「関係存在」について考えている私としては、特に関心を持った。

故郷、家族からも自分の存在を抹消され、自分の存在固有の証である実名さえ偽名にし、かつ、過酷な、悲惨な、凄惨な、環境、処遇、生活の中で、生き抜いてきた人間の生きようとする力とは、いったいどこからくるものなのであろうか。また、ある証言の中に、実名を名乗れるようになり、あるがままに生きるために「自分自身の中にある偏見を取り除くことができないと、本当の意味で人間回復はできない。」というこの洞察力は、どこからくるのであろうか。恩師は、正に、これらを私に気づかせ、考えさせようとしたのであろうか。

恩師からのこの命題に、これからも常に自己検証しつつ、私なりに拘り続けて行きたい。

「病気が良くなっていたから、主治医である○○○先生に、退所したらどうかと勧められた。」と、後に社会復帰したある証言者の話の中に、恩師の実名を目にした時は読んでいてびっくりした。隔離政策の色濃い昭和 30 年代に、退所を勧めていたとは、さすが恩師！

２５人の生き様を収録したこの本を目にしたのも、恩師の私への約束を果たすための導きであったのであろうか。私には、そんな気がしてならない。

恩師に、本の中に名前を拝見したことをお伝えしたところ、後日、「昔を懐かしく思い出した」とお手紙をいただいた。今も恩師にお導きいただいていることに感謝しています。

（2004 年 04 月 03 日　記）